

武蔵野市青少年平和交流派遣団 活動報告書

令和4年8月8日(月)～10日(水)



武 蔵 野 市

派遣にあたって



今年、武蔵野市は市制施行 75 周年を迎えました。この節目の年に、あらためて若い世代が、戦争や被爆の実相を学び、平和の大切さについて考える機会となるよう、市内在住・在学の中学生・高校生を、青少年平和交流派遣団として公益財団法人長崎平和推進協会が主催する青少年ピースフォーラムに派遣しました。

戦後 77 年が経過し戦争を体験した世代は減少していますが、団員の派遣団への応募動機からは、家族や親類からの話、学校での授業、ニュースなどで戦争について知り、平和のために自分にできること、すべきことを考え、それを広めていきたいという思いが伝わり、非核都市宣言のまち武蔵野市の市長として頼もしく感じられました。

事前学習においては、市内在住の被爆者の方のお話を伺ったり、市内の戦争遺跡を巡るなど、原爆や武蔵野市内にあった中島飛行機武蔵製作所への空襲について学習しました。団員は、戦争の悲惨さや平和の尊さについて考えるなかで、戦争体験を直接聞ける最後の世代という自覚を持って、青少年ピースフォーラムに臨むことができたと思います。

長崎市では、青少年ピースフォーラムのほか平和祈念式典にも参加しました。被爆者の方のお話や長崎の原爆遺構の見学などで戦争と平和について学んだほか、全国から集まった青少年と平和について意見を交わしました。団員にとって、全国の同年代の若者たちと課題を共有し、真剣に学んだことは、有意義な2日間だったことでしょう。今回学んだ経験を、ぜひ家族や友人など、周りの方に伝えていただければと思います。

市では、平成 23 年に武蔵野市平和の日条例を制定し、初空襲を受けた 11 月 24 日を「武蔵野市平和の日」と決めました。この日の意味を、世代を超えて共有し、戦争も核もない世界を実現するため、国内外へ平和の尊さを発信してまいります。

令和4年 11 月
武蔵野市長 松下 玲子

も く じ

1 武蔵野市青少年平和交流派遣事業について……………	1
2 平和交流派遣の様子……………	5
3 事前学習の様子……………	13
4 平和交流派遣を終えて……………	28
5 編集後記……………	44



武蔵野市青少年

平和交流派遣事業について



武蔵野市青少年平和交流派遣団の概要

長崎に原子爆弾が落とされてから今年で 77 年が経過し、被爆の実体験者が少なくなる中、あらためて若い世代に、戦争の実相を学び、平和について考えてもらうため、市内に在住・在学の中学生・高校生 12 名を青少年平和交流派遣団として、長崎で行われる青少年ピースフォーラム(主催 公益財団法人長崎平和推進協会)に派遣しました。またサポーターとして大学生 2 名も参加しました。

派遣前の3回の事前学習で原爆や武蔵野市の空襲について学び、8月8日～10日は、平和祈念式典や青少年ピースフォーラムで被爆体験講話や平和を考える学習会に参加しました。

今後、団員たちは派遣で学んだことを家族や友人たちに伝え、平和への想いを広めていきます。

* 青少年ピースフォーラム

全国の青少年と長崎の青少年とが、ともに被爆の実相や平和の尊さについて学び、交流を深めます。同フォーラムでは、長崎市青少年ピースボランティアの高校生・大学生が平和学習の進行や被爆建造物の案内などを行っています。



青少年平和交流派遣団員名簿

派遣団員

氏名	学年	グループ
粕谷 怜花 (かすや れいか)	中1	2
久保村 直生 (くぼむら なお)	中1	1
天野 恵 (あまの めぐみ)	中2	3
角川 花衣 (つのかわ はなえ)	中2	1
岡田 二モ (おかだ にも)	中3	3
田邊 さくら (たなべ さくら)	中3	1
恒松 莉奈 (つねまつ りな)	中3	2
升水 昂希 (ますみず こうき)	中3	3
南 萌々菜 (みなみ ももな)	中3	2
小俣 亘平 (おまた こうへい)	高1	2
都築 高人 (つづき たかと)	高1	1
池田 沙愛美 (いけだ さえみ)	高2	3

大学生サポーター

加藤 舞 (かとう まい)
中野 綾音 (なかの あやね)

随員職員

毛利 悦子 (もうり えつこ)
高橋 瑠奈 (たかはし るな)

令和4年度 武蔵野市青少年平和交流派遣団 行程表

時	8月8日（月曜日）		8月9日（火曜日）		8月10日（水曜日）	
6	6:15	三鷹駅北口集合 マイクロバスで移動			7:00	起床
7	7:15	羽田空港着	7:30	起床	7:30	朝食
			8:00	朝食	8:00	荷造り
8	8:30	羽田空港発 【ANA661便】			8:30	ホテルロビー集合 マイクロバスで浦上天 主堂へ
9	10:30	長崎空港着 マイクロバスで移動	9:00	ホテルロビー集合 マイクロバスで会場へ	9:00	浦上天主堂見学
			9:20	平和祈念式典会場着		
10			10:00	平和祈念式典開式	10:00	グラバー園見学
11	11:50	平和公園見学	11:45	平和祈念式典閉式 会場発 マイクロバスで移動	11:00	グラバー園発 マイクロバスで昼食会 場へ移動
					11:30	昼食会場着 （オランダ物産館）
12	12:30	昼食会場着	12:00	昼食会場着	12:30	昼食会場発 マイクロバスで移動
13	13:20	昼食会場発 マイクロバスで移動	13:00	昼食会場発 マイクロバスで移動	13:40	長崎空港着 お土産等購入
	13:30	原爆落下中心地見学	13:30	青少年ピースフォーラ ム参加		
14	14:00	青少年ピースフォーラ ム参加				
15			15:30	青少年ピースフォーラ ム（2日目）終了	15:10	長崎空港発 【JAL612便】
			15:45	原爆資料館着		
16						
17			17:00	原爆資料館出口集合、 マイクロバスで移動	17:00	羽田空港着・解散 ** （電車で帰宅する場合 は職員と移動）
			17:15	城山小学校見学		
			17:50	山王神社見学		
18	18:00	青少年ピースフォーラ ム終了	18:30	宿泊ホテル着	18:30	三鷹駅北口着・解散
	18:30	宿泊ホテル着				
19	19:00	夕食	19:00	夕食		
20	20:00	ミーティング	20:00	ミーティング		
21						
22	22:00	就寝	22:00	就寝		

* 青少年ピースフォーラムは、（公財）長崎平和推進協会主催のイベントで

** 航空機の運航状況等により、時間が前後する場合があります。



平和交流派遣事業の様子



青少年平和交流派遣事業の様子

1日目 8月8日(月)

主な活動

- ・ 平和公園見学
- ・ 原爆落下中心地見学
- ・ 青少年ピースフォーラム1日目参加

・ 平和公園見学

平和祈念式典の準備が行われる中で、バスガイドの方に説明をして頂きながら、平和を祈念する様々な像などを見て回りました。第2回学習会の際に井の頭自然文化園で見た北村西望作の長崎平和祈念像を実際に平和公園で見ることができ、平和を祈念する中での武蔵野市と長崎市とのつながりを感じることができました。



・ 原爆落下中心地見学

長崎に投下された原爆は上空で爆破したため、落下した場所というものがないことが明確に分らなかったそうです。そのため、原爆の影響で地面に焼きついた影の線を頼りに原爆が落下した中心を見つけたそうです。原爆落下中心地は今では穏やかな空気に包まれた静かな場所ですが、落下当時のことを思うと、穏やかであることの尊さを感じられました。



・ 青少年ピースフォーラム 1 日目

プログラム内容（A コース）

- ・ 開会行事
市長あいさつ / 開会宣言 / 被爆体験講和
- ・ 室内学習
原爆の概要 / ワークショップ
- ・ こじんまりフィールドワーク

実際に被爆を体験した方からの話を聞き、教科書だけでは分からないことを学ぶ良い機会になりました。被爆体験者の方々が減少してしまっている今、若者である私たちが戦争の実相を聞くことが大切なのだと改めて実感しました。

ワークショップでは、自分にとって大切な人やもの、場所などを配られたカードに書き、実際に戦争が起きるとカードに書いたものがどのタイミングでどのように失ってしまうのかを体験しました。原爆が投下されるまでの間で既に多くの人がカードを半分以上手放してしまっており、原爆が投下されると一枚も残らない人がほとんどでした。

こじんまりフィールドワークでは、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、原爆殉難教え子と教師の像、「未来を生きる子ら」の像、長崎原爆資料館展望デッキの四力所を巡りました。原爆死没者追悼平和祈念館では、原爆死没者の方々のお名前が記された本が収納されている場所などを見学しました。水を求めながら息絶えてしまった被爆者の方々へ水を捧げるために祈念館に設置された6つの水盤を見て、ただ被爆の惨状を知るだけでなく、原爆によって亡くなられた方々とどのように向き合うのか、ということの大切さも感じられました。



2日目 8月9日(火)

主な活動

- ・ 平和祈念式典参加
- ・ 青少年ピースフォーラム2日目参加
- ・ 原爆資料館見学
- ・ 山王神社見学

・ 平和祈念式典

入場制限がある中、幸いにも私たちは全員が平和祈念式典に参列でき、11時2分に平和祈念像の前で黙祷をすることができました。国内外から多くの参列者を迎えての開催となった式典では、メンバーの平均年齢が高齢化したことを理由に今年が最後の参加となった被爆者の合唱団「ひまわり」が、平和への想いを歌詞にのせて合唱してくださいました。

被爆から77年を迎え、当時のことを語ってくださる方々が少なくなっている今、このように平和を想う機会があることがどれほど重要なことなのかを実感しました。



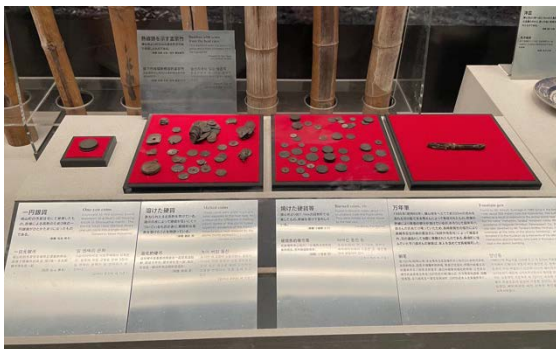
・ 青少年ピースフォーラム2日目

初日のピースフォーラムでは、「被爆の実相を学ぼう」をテーマに行われましたが、2日目のテーマは「平和・自分たちの未来について考えよう」というものでした。日本全国から集まった派遣団の方々と、それぞれ自分たちの地域で行なっている平和事業について話し合った後、「戦争がどうして起こってしまうのか」「戦争が起こらないようにするためにはどうすれば良いのか」について意見を出し合いました。ピースフォーラムに集まった全員が、「戦争を2度と起こさない」「平和を大切にする」という想いがある中で、そのためにどうすれば良いかという点では、人それぞれの考え方から生まれる多種多様な意見が生まれ、とても有意義な機会となりました。



・原爆資料館見学

長崎に投下された原子爆弾や、原爆による被害の凄まじさと規模を物語る資料を目にして、より一層原爆の恐怖というものを体感しました。私たちが日常生活で使う硬貨や万年筆などが熱線によって焼けたり溶けたりしてしまった様子や、熱線によって変質してしまったガラス皿などは、原爆で亡くなられた方々が私たちと何ら変わらない普通の生活を営んでいた方々だったということを表しているように感じました。



・山王神社見学

不思議なことに、柱が一本の状態で見えている鳥居があります。この鳥居は爆風によって片方の柱が折れ、一本足になってしまったのです。また、山王神社にある2本のクスノキは、爆心地から南東へ約800メートル離れていたにもかかわらず、原爆の炸裂による強烈な熱線と凄まじい爆風によって大きな被害を受けました。クスノキの幹に開いた穴の中には小さな瓦礫が入っていました。鳥居の現状、そしてクスノキの状態から、原爆の威力がどれほどのものだったのかを知ることができました。



3日目 8月10日(水)

主な活動

- ・城山小学校見学
- ・浦上天主堂見学
- ・グラバー園見学

・城山小学校見学

本当は2日目の見学地として訪れるはずだった城山小学校ですが、団員の皆さんが青少年ピースフォーラムや原爆資料館の見学に熱心に取り組んでいたため、最終日1つ目の見学地となりました。バスを降りて長く急な階段を上ると、コンクリートでできた建物が見えてきました。これが城山小学校跡です。建物の中には戦争当時の写真や全国から届いた千羽鶴などが多数飾られていました。職員の方からお話を聴くことができ、より理解が深まりました。小学校の校庭では今もなお残る、嘉代子桜を見学しました。長崎県の小学校ではこのような70年以上前の戦争跡が多く残されています。それは昔のような惨劇を決して繰り返さないという強い信念を感じさせるものでした。



・浦上天主堂見学

外から見るととてもきらびやかな印象を受ける建物ですが、中に入らせていただくととても厳かな雰囲気のある教会でした。建物の中に入る前に、添乗員の方から教会内では帽子を脱ぎ、喋ったりしないようにと注意を受けていました。実際に中に入ってみると、初めて感じるような圧倒感のようなものがあり、外ではにぎやかだった団員の皆さんも自然と静まり返っていました。教会内の順路の最後では、被爆したマリア像のレプリカを見ることができました。レプリカといえども、何だか考えさせられるものがありました。



・グラバー園見学

このグラバー園見学は、今回の派遣事業唯一の観光といっても過言ではないでしょう。最後の訪問地ということで、多くの団員の皆さんがこの地でお土産を買ったり、記念撮影をしたりしていました。本当に坂道が多く息を切らしながら順路を進んでいましたが、長崎の地に触れることのできる有意義な時間でした。



MUSASHINO CITY



青少年平和交流派遣団員が着用したポロシャツにプリントされたデザイン

イラスト：角川 花衣



事前学習の様子



第2回学習会より

事前学習について

結団式

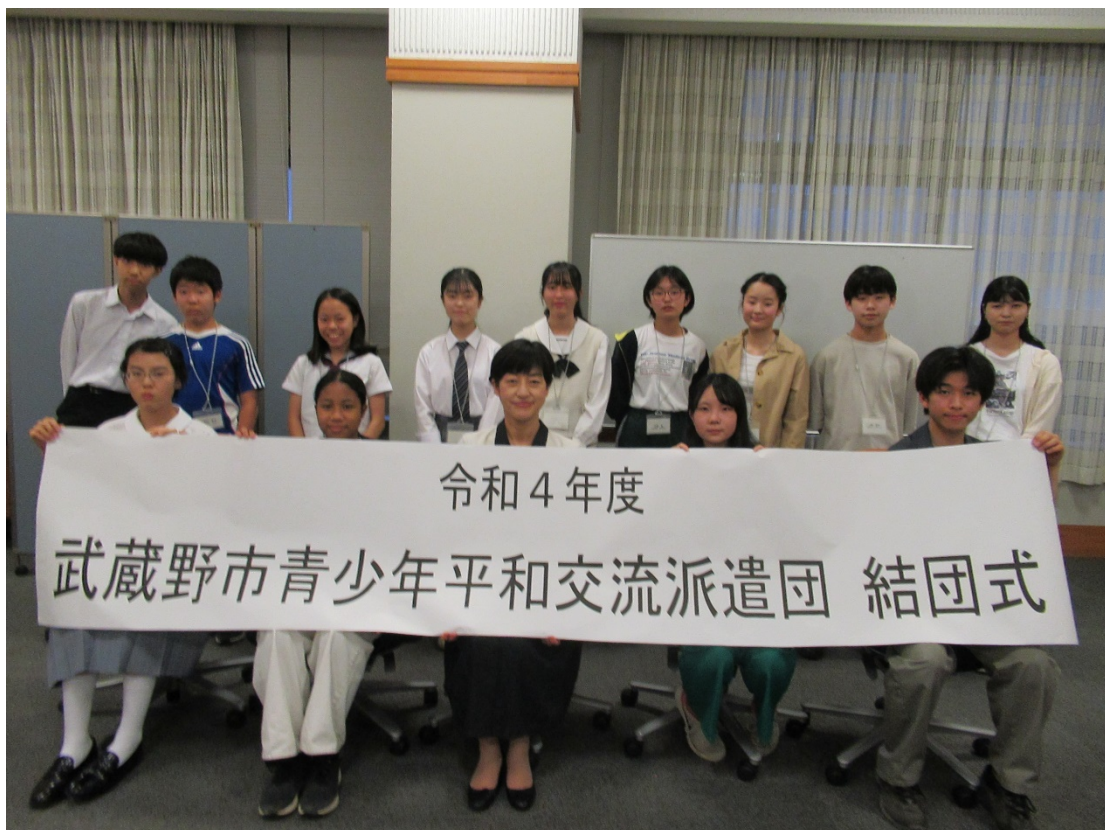
6月13日（月）

文：加藤 舞

結団式の会場に次々とやってきた中高生の皆さんの表情からは、これから長期間行われる平和事業に対して意欲的に取り組もうとしている様子が感じられました。

結団式では団員の自己紹介、配布された資料や要項の説明、参加表明などを行いました。団員皆さんがそれぞれ自分の言葉で参加した理由や意気込みを述べていて、各々明確な理由をしっかりと持っているところにとっても驚かされました。皆さんの平和に対する思いや、今回の青少年平和交流派遣事業に対する意欲が垣間見え、派遣団への参加を強く望んだのだろうなと思えました。

大学生サポーターという中高生の皆さんをサポートする立場として、私も精一杯頑張ろうという気持ちになりました。



第1回学習会

6月21日（火）

文：事務局

一回目に行われた学習会では、「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」の牛田守彦さんと、「武蔵野けやき会」（武蔵野市原爆被爆者の会）代表の藤本竹次さんに講師としてお越しいただきました。

まず初めに、牛田さんの解説のもと、武蔵野市の戦争の歴史について学習しました。

私たちの住んでいる武蔵野市でも、とても悲惨な戦争の被害があったという事実を改めて知りました。現在の都立武蔵野中央公園がある場所には、戦時中、中島飛行機武蔵製作所という、東洋一とも言われるほどの大きな軍事工場がありました。工場では戦争で使用された多くのエンジンを作っていたため、米軍による工場を狙った爆撃が9回繰り返されました。多くの方の命が犠牲となり、更にここでは広島、長崎に落とされた原爆の模擬爆弾も落とされました。

次に、自らが原爆の被爆者でもある藤本竹次さんのお話を伺いました。小さい頃に、長崎にて被爆をされたという、滅多に聴くことのできない貴重なお話でした。

また、小さい頃に悲惨な経験をされたにも関わらず、現在も市内の子どもたちに被爆体験を伝える活動を行うなど、力強く生きている方の姿を見て、心が動かされました。



第2回学習会

7月17日（日）

文：中野 綾音

夏にしては珍しく肌寒く雨が降るなか、私たちは第2回学習会に参加するべく武蔵野市役所北玄関に集合しました。

第2回学習会ではマイクロバスと徒歩で移動し、武蔵野市内の戦争にまつわる地を訪れました。当日は「武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会」の牛田守彦さんが同行してくださり、私たちは各地点で掲載されている説明文よりも詳しい武蔵野の歴史を学ぶことができました。

まず私たちが訪れたのは、武蔵野総合体育館です。市役所の目の前にあるこの場所は、戦争時に学徒たちが集まる校庭として利用されていました。昔の惨劇が全く感じられないほどに、今ではきれいに舗装されたトラックです。マイクロバスで移動し、私たちが次に訪れたのは、都立武蔵野中央公園・はらっぱむさしのです。この場所は今では、たくさんの建物に囲まれた団地になっています。団地の中央に広場があり、そこには戦争時に存在した中島飛行機武蔵製作所の説明板が設置されていました。戦後、中島飛行機跡を残すか残さないかということを市民の方々が真剣に考えた結果がその場には広がっていました。公園を歩いて進み、源正寺に向かいました。朝は雲に覆われ薄暗かった空がこの時間帯には明るくなり、頭を焼くような暑さでした。源正寺では戦争で攻撃を受けたときの跡を見学しました。攻撃以前から建てられていた墓は中島飛行機攻撃の際に多くの被害を受け、弾や瓦礫が飛び散った跡が今でも残っていました。その後は徒歩で、延命寺に向かいました。延命寺では戦争体験者である住職の方からお話を聴くことができました。出征する家族や近隣者に渡した寄せ書きや当時使っていた鉄兜などを見せていただきました。次に向かったのは、武蔵野ふるさと歴史館です。この施設には戦争時の資料や映像がたくさん残っており、資料を用いた説明をしていただいた他、当時米軍が空から撮影した中島飛行機の映像を見せていただきました。最後に見学したのは、井の頭自然文化園の彫刻館です。この彫刻館には、彫刻家の北村西望さんの作品が多数残されています。何よりも目を引いたのは、長崎の平和祈念像のレプリカです。職員の方にどうして平和祈念像があの様な佇まいなのか、どうしてあの様な容貌なのかをお聴きし、長崎平和交流派遣団前の事前知識をインプットすることができました。

この1日で、実際にたくさんの見学地を訪れ見聞きしたことで、武蔵野市の平和への取り組みや市民の方々の思いを知ることができました。これをもとに、団員の皆さんも長崎平和交流派遣への意識が高まったのではないかと思います。

第3回学習会

8月3日（水）

文：中野 綾音

第3回学習会は武蔵野市役所の一室で行われました。この学習会では、団員の中学生高校生の皆さんがこの日のために一生懸命作成した模造紙を持ち寄り、それを発表しました。

団員の皆さんは事前に3つの班に分かれ、そのカテゴリーからさらに自分の興味のあることを調査してきました。

作成者によって調査内容のアウトプットの仕方が全く異なり、非常に興味深かったです。様々な写真をプリントアウトして貼っている人やグラフを手描きで書いている人、三コマ漫画で歴史を表現している人など、多種多様な報告会でした。そのような場面から、団員の皆さんの個性を垣間見ることができたと思います。また、この模造紙は11月23日の平和の日イベントでも展示されます。団員の皆さんの努力の形を来場者の皆様にご覧いただけることを、心から楽しみにしています。



第3回学習会 発表資料

グループ1 テーマ「長崎の自然・歴史・文化を調べてみよう」

長崎の外交と歴史

日本の昔の玄関口として長崎県の出島があります。何世紀にも渡り世界と日本を繋いできました。京・堺に並び日本文化を形成しました。

1600 関ヶ原の戦い | 朱印船貿易 | 1637 島原の乱 | 鎖国完成

スペイン
ポルトガル

- ・新教を伝えに来航する。
- ・**平戸**に商館を置く。

ポルトガル

- ・明(中国)産の生糸を長崎に運び、日本に持ち込める。

オランダ
清(中国)

- ・平戸にある商館を**出島**に移す。
- ・**蘭船**は、絹織物・綿織物・薬品・書籍などを持ち込む。
- ・出島に**唐人屋敷**を設ける。

オランダ

- ・日本に来航した最初の船**リーフデ**号

- ・ルソン(フィリピン)
- ・トンキン(北部ベトナム)
- ・アンナン(中部ベトナム)
- ・カンボジア
- ・タイ

なども来航

中央区観光協会特派員アログ
世界遺産検定公式テキスト2級
山川出版社 日本史B

長崎の名物名産品

<グルメ名物>

○長崎ちゃんぽん

豚肉や魚類を使用した
コクのある白濁スープに
たっぷりの野菜を具とした
麺料理のこと。



○長崎カステラ

お土産としても人気
のある商品。底にザラメ
がまぶされている。
大粉のざらめの食
感もたまらない。



○佐世保バーガー

長崎で有名な手作り
名物。特徴として、決ま
った具材や作り方がある
わけではなく、佐世保市の
それぞれのお店で手作りのもの。



<伝統・文化>

○長崎ペーロン

長さ14mの船に26人のこぎ手
が乗り、たいこドラに合わせて、
1150mを競漕する。



○チャンココ

頭に紅白の布を垂した花笠
をかぶり、腰みのをつけて、
「オオモーオンデーオンヤミヨーテ」と
唱える。



<名産品>

○長崎びわ

全国NO.1. 国内の収穫量
の29%(1050トン)を占めている。
栽培は江戸時代から続いている。



○長崎三大ブランドあじ

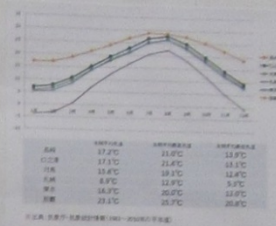
全国NO.1. 長崎市の「ごんあじ」と
「野母んあじ」、松浦市の「旬あじ」は、
「長崎三大ブランド」と呼ばれている。



長崎県の地理や気候

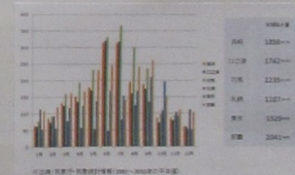
<気温>

長崎市の夏の気温は、
30℃をこえるが、35℃
以上の猛暑日はほとんどない。冬
の気温は平均4℃前後で雪が降る
ことはめったにないが東シナ海の
季節風によつて大雪になること
がある。(平均気温16～17℃)



<降水量>

年間降水量は約1800ミリ。6月～8月に多く降つて
いる。温暖多雨の気候を有し、
対馬暖流の影響を受け冬は比較
的に暖かく夏は涼しい海洋性の気
候に恵まれている。



長崎市の現状

1.面積

405.9km² (全国ランキング37位)
(国土地理院 面積調べ 2021年10月現在)

2人口

399,913人
(2022年7月1日現在)

3 平和活動

。 平和への灯火

平和への思いを手作りキャンドルに込め原爆で亡くなった多くの方々が慰霊し、一人ひとりが原爆の惨過を決して忘れることのないよう毎年開催している参加型の行事。

。 平和学習発表会

長崎市内の中学生が一堂に会し、日頃取り組んでいる平和学習の成果などの発表を通して、各学校における生徒の平和への取り組みを発展させる機会として開催。

。 長崎市市民平和憲章

。 平和の泉

。 青少年ピースボランティア

原爆による人的被害

主な被害

熱線

地表の温度が
3000~4000度にまで
達し、**重度の火傷**を負った。
鉄が溶ける
温度が1500度
だから、その
倍以上の熱さ
であったことが
わかる。

爆風

人が吹き飛ば
される・建物の
下敷きになる・
飛んできた
ガラスが体内
に入るなど、
ガラスの破片
がいまだに
体内に残っている
人もいます。

放射線

原子爆弾によって
降ってきた
放射線に**細胞**
を傷つけられる
ことで細胞死
や突然変異が
生じ、体内の
臓器などが
正常に動かなく
なってしまう
死に至ることも。

高熱火災

熱線が原因で
建物が**自然発火**
してしまい、
逃げられなかった
人たちが
生きている
状態で焼かれて
亡くなった。



← 原爆で壊れた本庁舎郵便局
左奥は新燃香国民学校



被爆後の長崎駅前 →



← 原爆で止まった
柱時計

今でも続く被害

原子爆弾による放射線は被爆直後の
急性障害だけでなく、その後も
長期にわたって様々な障害を
引き起こし、被爆者の健康を現在も
なお脅かし続けている。

～1946年初めごろ(1年弱後)～

- ・ケロイド症状の現れ
- ・胎内被爆児の死
死を逃れても小頭症などが
現れた。

～被爆から年月を経て～

- ・白血病などの癌を患う人が
増加。

～心の被害～

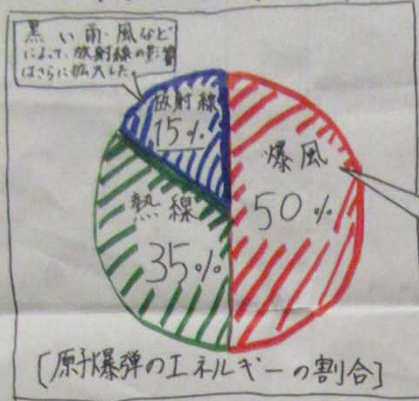
原爆は多くの身近な人も
それまでの日常も**一瞬で奪い**
生き残った人たちの心の傷と
なり続けている。

被爆者に対する 援護施策

- ・1957年(12年後)に
「原子爆弾被爆者の医療等
に関する法律」の制定
- ・1968年(23年後)に
「原子爆弾被爆者に対する
特別措置に関する法律」
の制定
- ・1994年(49年後)に上二つを
一本化した
「原子爆弾被爆者に対する
援護に関する法律」の制定
(= **被爆者援護法**)

原爆の惨禍が**繰り返されること**が
ないように平和を念願することや
被害者に対する保健・医療・福祉
など総合的な援助は国が行う。

長崎原爆の物的被害について



爆心地から距離	最大風速(m/s)	被害内容
0km	440	鉄骨建造物の総崩壊 屋根・周壁もない状態
0.5km	280	(木造建物は全壊)
0.8km	200	鉄筋コンクリート耐震設計のもの 以外の建物はほぼ全壊。
1.8km	72	この辺りまで大被害 (全ての建物大破・修理不能)

熱線による被害

原爆が爆発した際直径280m、表面温度5000℃の火球となり、太陽と同じ熱で長崎の町を襲った。特に大きな被害をもたらしたのは、爆発後0.3秒後〜3秒の間に大量に放出された赤外線。熱線が原因の火災もおきた。

被害の実態

当時長崎には約4500〜4900戸の建物があつたと推定される。

当時長崎にあった建物のうち、約1割が全壊・全焼したと推定される。

全壊=1326戸
半壊=5509戸
全焼=1574戸

イメージ

500m地点の場合

1m四方の広さに、
19トン(自家用車15台分)
の巨大な力がかかっていた。



[長崎市内の原爆遺構]

浦上天主堂

爆心地から北東に約500mの小高い丘にあつた浦上天主堂は東洋一の巨大さを誇っていたが原爆によってわずかに南側の側壁の一部を残すのみとなった。



長崎刑務所浦上刑務支所跡

長崎刑務所浦上刑務支所跡は、爆心地から北に最短で約100mの地点にあつた。爆心地に最も近い公衆の建物である。原爆により、刑務所内には被害者18名、被害者家族35名、受刑者及び家族被害者81名の計134名全員が死亡。

他にも、山王神社や山王小学校、旧城山国民学校校舎等の長崎市内原爆遺構がある。

[参考文献]

- (NHK)原爆の記憶 ニッポンがわかる
- 長崎市公式観光サイト
- NHKスペシャル(動画)

長崎市

長崎大学医学部原爆被災学術資料センター

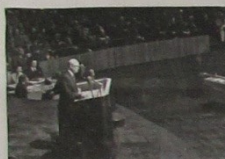
グループ3 テーマ「世界の核兵器と廃絶の取り組みについて調べてみよう」

核の平和利用

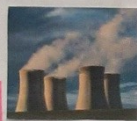
Atoms For Peace (平和のための原子力)

1953年12月9日

ドワイト・D・アイゼンハワー：アメリカ34代大統領が国連総会に向けて行った演説。彼は「核兵器を兵士達の手に取り上げるだけでは十分とはいえない。そうした兵器は核の軍事用の包装を剥ぎ取り平和のために利用する術を知る人々に託さなければいけない」と言う。ドワイト氏はそれらを達成することでこの最も破壊的な力がすべての人類に恩恵をもたらす偉大な恵となり得ると断言した。大統領の演説は「国際原子力機関(IAEA)」の創設に繋がり、1950年から1960年は核の危険性について深く考えられた年代となる。ドワイト大統領の考えは改めて人間が世界の核の使い方を見直す大事な機会となった。



アイゼンハワー大統領



国連総会にて

原子力発電:

2019年度原子力発電は世界全体で使われるエネルギーの10%を示す。日本でも2021年度7.2%のエネルギーを原子力に頼る。



原子力発電の燃料: ウラン/プルトニウム

メリット:

- 発電時にCO₂・二酸化炭素を排出しない
- ウランは再利用や安心した供給が可能
- 発電や運用にかかるコストが小さい
- 温室効果ガスの面でも有効

→ ⚠️ 放射能による公害問題も重要視されている。

害虫駆除:

不妊虫放飼法(SIT)を使い、特殊な放射線に当てられ交尾は可能だが子孫を残せない状態の虫を野生に返し、野生の数を減少する方法が使われる。放射線により影響を受けた虫はその後子孫を残すことは不可能となり最終的には特定の地域にいる虫への絶滅に繋がる。

→ ⚠️ 自然への冒涇や道徳的問題により批判の声。

長い文章を読むのが面倒くさい人へ:

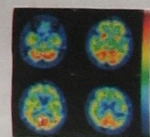


核医学

アイソトープ検査・RI(アールアイ)検査と呼ばれる。同位元素(アイソトープ)とは原子番号が同じで、核の中の陽子と中性子の数が異なるもの。アイソトープから放たれるガンマ線を撮像、画像化することにより体の様子を調べる事が可能。放射線の量が少ないため、体内の被害も少ない。



アイソトープ検査に使われる検体



「核の平和利用」なんてものはない!

「核の平和利用」はどうしてもやがて核の製造につながる恐れがあり、不利な点が有利な点より遙かに多いため核の廃止を求める声も。実際核の利用は環境汚染や自然破壊につながる。

原発事故は現在で100件以上、なお世界には約440台もの原子力発電所が発動している。

環境生物被害などをかんたんに出してしまう核は、及ぶところは重すぎるため、人間は核の平和利用という概念すらも廃止するべきだと言う声も多い。



日本の核兵器廃絶活動

日本は戦後唯一の被爆国として核兵器の
廃絶活動を行っています。

その中で去年核兵器禁止条約が発効されました。

～核兵器禁止条約～

核兵器禁止条約は名の通り核兵器を禁じる条約です。

開発、保有、使用を禁止しています。

条約として核兵器が違法だとされたのはこれが初です。

しかしロシアやアメリカなどの核保有国は参加していないため
ほとんど効果がありませんでした。核保有国どころか日本も
参加していません。これには唯一の被爆国として

不参加ということに矛盾を抱いている人がいます。

～日本不参加の理由～

- ① 核兵器を完全に禁止するのは難しく宣言だけに
なってしまうから。→ 内容に問題がある
- ② 日本はアメリカの核の傘で守られている。
そしてそのアメリカが参加していないため。
参加国はアフリカなどの力のない国々なので
いざという時に頼りにできない



日本の安全保障に問題がある

／ CAN (核兵器廃絶国際キャンペーン)
NGO (非政府組織) 団体

核兵器禁止条約の成立に大きく貢献



ノーベル平和賞を受賞

世界の核兵器廃絶

への取り組み

広島・長崎
の被爆

世界でも

核兵器廃絶の声

- ICAN -

核兵器の廃絶を
目指し活動する



・被爆者の声を世界に!!

・政府との対話を促進!!

⇒国連で核兵器禁止条約が採択

↳2017年 ICAN、ノーベル平和賞を受賞

- 記憶の解凍 -

戦時の白黒写真を

AIでカラー化!!

⇒より身近に感じてもらう

五感へのアプローチ

ex) 曲「Color of Memory」





平和交流派遣を終えて



派遣団に参加する前、私が戦争や原爆について知っていたことは、学校で教わった「事実」だけだった。1941年に太平洋戦争が始まり、当初は日本優勢だったが、サイパン島などの島々が攻められ、日本各地で空襲が激化。そして広島、長崎に原爆が落とされ、政府はやむなくポツダム宣言を受諾し戦争が終結。まとめるとこんな感じだろうか。

戦争や原爆というものに、自分とは無縁だと感じていた節もあったが、派遣団の事前学習会で戦争体験者の話を伺ったり、フィールドワークや長崎原爆についての調べ学習をしたりしたことで、自分の身の回りにも戦争に関係するものが多く存在していたことに気付いた。

だが実際に長崎に行き、自分達の足で原爆遺構を巡り、原爆資料館に行き私は思った。

自分自身では想像できない事が起きていたのだ、と。爆心に一番近かった浦上天主堂は、わずかに南側の側壁を残すのみとなっていた。また、原爆資料館での被爆者の方々の写真が思わず目を伏せてしまいたくなるような、そんな有様で、たった一つの原子爆弾の威力がこれほどまでも大きなものだと知った。

また、2日間にわたって参加したピースフォーラムで印象に残ったのは、現在、原子爆弾の数は2010年に比べ減少しているが、その内実は使用不可になった核を大量に捨てているだけで、核兵器廃絶の道を順調に進んでいるわけではないという事だ。しかも、現在の原子爆弾は、技術の進歩により77年前に長崎で炸裂したものより格段に威力が上がり、被害範囲も広がってしまうという。

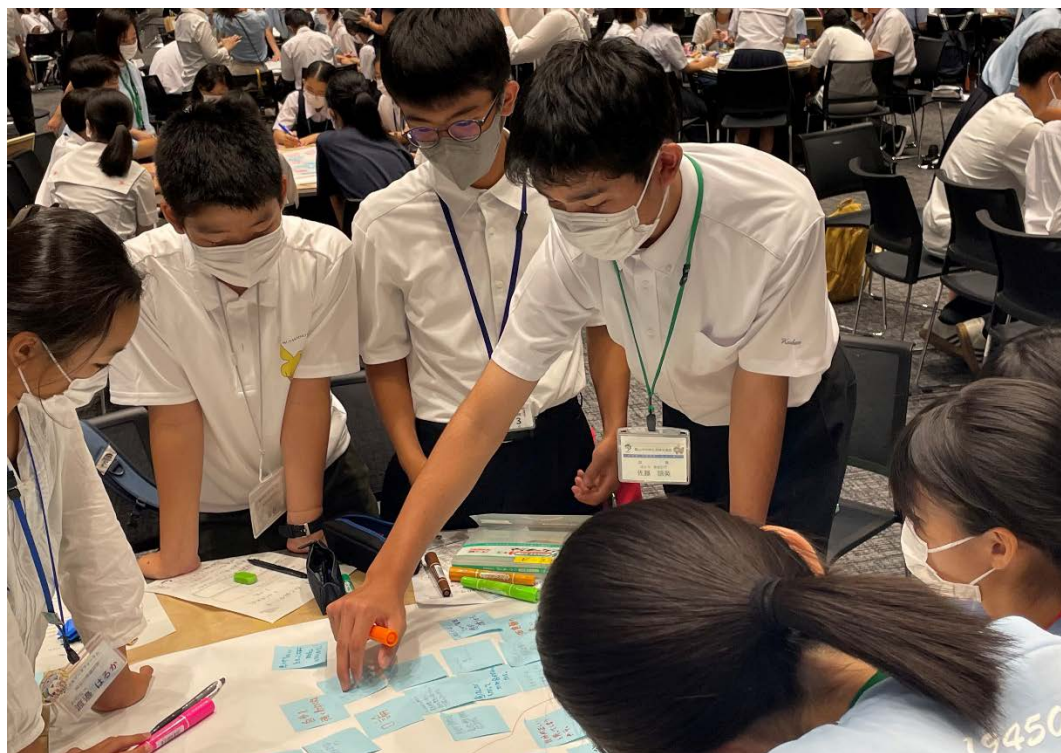
そんなものを使用したら、世界中の人が核の脅威におびえ、核を持つ国が世界を支配してしまうかもしれない。そんな未来を作らないためにも、自分から出来る事をしていきたいと強く思った。まずは身近な人に、今回学んだことを伝えようと思った。



僕はこの派遣事業を通して、戦争を経験した人の話が聞ける貴重さを実感しました。戦後 77 年が経ち多くの被爆者や戦争経験者が亡くなっている中で、実際に長崎に行き直に戦争を経験した人の話が聞けたことの凄さを感じました。しかし聞いて自分のものになっているだけでは意味がありません。これから先は戦争経験者から、話を聞くのが難しくなっていくと思います。なので、自分たちが聞いたことや感じたことを家族や友人などに伝えるということが非常に重要だと感じました。

今回印象に残ったのは、ピースフォーラムです。ピースフォーラムでは、全国の様々な人が集まり、自分とは違う年齢の人と話し合いや、フィールドワークを行いました。話し合いは、戦争に関連する様々なテーマをグループごとに意見を出し合うというものだったのですが、自分とは違う見方や考え方があって驚きました。この話し合いによって、平和や戦争に対する考え方が、広まったと思います。話し合うことでコミュニケーションがとれて仲良くなった人もいます。話し合うことは意見交換だけでなく、こういったことにも効果があるのだと感じました。

実際に長崎に行ったことで「戦争とは?」「平和とは?」など普段考えないことを考えるきっかけになりました。しかし、先程述べたように長崎に訪問して自分が考えたことや、感じたこと、聞いたことをしっかりと周りに伝えなければなりません。現在ウクライナで戦争が起こっている中で、今後日本だけでなく世界で、戦争が起こらないように、核兵器が使われないように、核や戦争のことを周りに伝えたいです。



私は今回の被爆地長崎の訪問で、半分になった鳥居など、77年前の戦争の痕跡が日常に溶け込んでいると感じました。というのも、東京で戦争の痕跡を感じる場所や施設はほとんどないからです。そして、出発前に学んだ「戦争の悲惨さ」と「平和の大切さ」はより現実味を持つようになりました。特に、1日目のピースフォーラムのワークショップは印象的でした。ワークショップでは、最初に自分大切な物を書き出します。私は「家族」「友達」「スマートフォン」「学校」「部活」と、書きました。すると、進行役の人が「あなたの地域に爆弾が落ちました。あなたの家は無事でしたが、学校などの公共施設や交通機関、インフラがなくなりました。学校に行けなくなったので、紙に学校や学校の友達などを書いた人は手放してください。」と言い、私の手元からは「学校」「学校の友達2名」「部活」がなくなりました。私の手元には「スマートフォン」が残りましたが、「スマートフォン」はインフラが遮断されるため、持っていても役に立たないことから、手元からその紙がなくなりました。最終的に家の近くに爆弾が落ち、手元に残っていた紙も全てなくなっていました。私はこの時、突然失う喪失感と、いつ奪われるかわからない恐怖感を抱き、早く家に帰って大切な物を確認したいという衝動にかられました。

事前学習と訪問、ワークショップを通じて、戦争を絶対にしてはいけないという強い気持ちと、今ある平和のありがたさを改めて感じることができました。そして、東京の日常生活でも、先の戦争を意識する鳥居や石碑があるのでは？と探すようになりました。まだ見つけれられていませんが、見つけたら発信したいと思っています。



「あなたにとって平和とはなんですか」

これは、派遣団に参加する前に面接で聞かれた質問だが、そのときは戦争や平和に対する知識も少なく、平和についての理解も浅いものだった。あの日の答えは漠然としていたが、長崎への派遣を通じて、「平和」についての自分の意見により自信をもてるようになったと思う。今回は77年前無差別に亡くなった人々と同じ地を踏み被爆者の方々のお話を通じてあの悲劇を見ることによって戦争や人を傷つけ合うことの無意義さを感じ、どの理由であっても人を害する未来では平和が望めないことを学んだ。派遣団全員が平和に興味と情熱を持った環境で学ぶことができたため、意見交換や考察ができてとても良かった。私は平和とは、好きな人や物を自由に愛せ、愛されることが可能な状態だと思う。平和式典、被爆者合唱隊や体験談、資料館などに残された記録などをみて、どれくらい罪のない命が失われたか知り、それがどうその人自身を含め家族や友人などの未来を悲慘に変えたのかを考えさせられた。

2022年国際的なつながりが重要になった今、一つの場所の和も世界に共有されなければ平和にはつながらない。私の国際オンライン学校では各国の生徒が集う。オーストラリア、マレーシア、ヨルダン、そして日本。英語というたった一つの言語を通じて何千年もかけて創られてきた歴史や思想を議論する。そこで印象的だったのが平和についての取り組みを自ら実践する生徒の数が圧倒的に日本人だったことだ。やはり他の国と比べて日本国民は原爆投下のような過去の上で平和の尊さについて理解しようとしているからだろうか。私達は子供だからといって、未来を創る役目を他に託してはならない。未熟だからこそ、渡された課題に向き合い、今から背負わなければいけない何が起こることも可能な爆弾状態の地球の未来をたった今から、全てが手遅れになる前に変えるよう行動を取らなければいけないと思う。



私は、青少年平和交流派遣団員として長崎へ行き、77年前の戦争の悲惨さを学びました。平和とは、今私たちが当たり前で過ごしている毎日だと知ることが出来ました。

同じ年の子たちが、戦争という争いに巻き込まれ、罪のない市民が原爆によって被害を受けたことは、今後決して2度と同じ過ち犯しては行けないと強く心に思いました。原爆が落とされ被爆したことにより、多くの犠牲者が出ました。私は福島原発が地震で爆発した時に上がったきのこ雲が、長崎や広島で落とされた時にできたきのこ雲と同じだという話を母から聞いたことがあります。2011年被ばくを逃れるために、福島から避難してきたときに、母から食べ物や外遊びの制限を受けていたことは、被爆から守ろうとしていたのだということを長崎に行って被爆者の話を聞いて理解することができました。

原爆資料館や被爆した方のお話を聞いて、当時の人々の助けを求めている絵などをみて原爆の酷さを改めて感じました。

原爆は恐ろしさを今でも傷跡を残しています。間近に見る事によって「核」の恐ろしさを知るだけではなく、原発でも核を扱っている事として同じ被ばくを繰り返さないためにも、考える大きな機会になりました。

長崎を最後の被爆地にするためにも、被爆地だけではなく、全国で平和についてもっと力を注ぐべきだと思います。原爆を体験した人たちがだんだんと少なくなっている中、私たちの世代が伝承し、核のない平和な未来を作っていかなければいけないと同時に、どうやって伝えていくかという現実をもっと身近に作っていきたいと思いました。



「平和はなぜここにあるのだろうか。それは多くの人の犠牲の上にあるから。」

この言葉は青少年ピースフォーラムで耳に残った言葉だ。77年前のあの日、爆風によってふき飛ばされていく人々、耳と目を抑え伏せた体勢のままの人々、無心に歩き続ける真っ黒になった人々の行列、「水をください」と飛び交う声…今まで想像もできなかった映像が被爆者、被爆体験者からの力強い言葉で私の頭の中で作り上げられていった。さらには、暗くなりサイレンが鳴り響く会場の中で訓練時に行う、目と耳をおさえ伏せた体勢を実際に行った。私達はサイレンがいつ鳴るのかを知った上で行っているのに、当時のあの場にいたらどれだけの怖さを味わっていたのだろうか、と想像した。

言葉では表せないようなこの恐怖の時間は、実際に訓練時の体勢になってみて初めて感じられた。あの「きのこ雲」の下で被爆された人々の痛み、これは私たちの世代が自らの声で何よりも伝えていかなければならないことだと強く感じた。

平和祈念式典で、ひまわり合唱団が歌った「もう二度と」の歌詞の一つひとつは、「長崎を最後の被爆地に」という青少年ピースフォーラムで何度も耳にした言葉と重なり、被爆者の力強い気持ちにのせられた美しい歌声が心に深く刻まれた。

被爆者、被爆体験者から直接伝えられた、この感覚を忘れずに心に留めおき、まずは身近にいる方々、来年からの一年間は留学先で、自らの言葉で現地の方にも平和の尊さを、責任を持って伝えていきたいと思う。



今回の青少年平和交流派遣団を通して学んだことが2つあります。

1つ目は戦争、原爆の恐ろしさです。戦争中や原子爆弾が落とされたあの日、失わなくてもよかった友達、住んでいた場所、家族が全て無くなりました。もし私がその立場になった時自分はどうしていたかというのをとても考えさせられたり、長崎の被爆地を見に行くと壊れかけた建物や鳥居などが熱風や爆風のすさまじさを物語っていました。

私は改めて戦争や原爆の恐ろしさを知りました。

2つ目は、他地域との交流です。1日目のピースフォーラムは像や資料を見たり疑似体験をしたりしました。疑似体験では、自分の大切な物や大切な場所、大切な人を紙に書いてもし、原爆で全て無くしてしまったらという疑似体験でした。1日目はあまり話せなかったけど、2日目は実際に北海道から沖縄までのたくさんの人たちと平和について話し合うことが出来ました。

私はピースフォーラムで色々な人の意見を聞いて答えが1つだけではないんだなと実感しました。

私は、中学3年生にも今できることがあるんじゃないかなと考えました。私は自分なりにもっと色々な人に、戦争や原子爆弾の恐ろしさを教えていきたいです。



はじめに、今回の平和交流を実施にするにあたりお世話になった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

今年は実際に長崎に足を運び、全国から集まった中高生と平和について語り合ったり、長崎市にある原爆の被害状況をこの目で見て学習をしました。私は小さい頃一度広島原爆ドームに足を運んだことがありますが、中学生になってから長崎原爆資料館や平和式典に参加すると広島の時とは違う思いが込み上げてきました。

まず、原爆が本当に落とされたということを身を持って感じたことです。もちろん事前学習や学校の授業で広島、長崎に原爆が落とされたという事実は認識していました。しかし、どこか原爆とは遠い昔の話だと思っていた節があったようで、いざ長崎の地の遺産や資料館を見ていると恐ろしい気持ちで一杯になりました。また、資料館で被爆者の方の写真を見ていろいろなことを考えさせられました。亡くなった方達、一人一人に家族いて、思い出が合って、人生がある。そのように考えると戦争というのは人の全てを奪うことを身をもって痛感できました。

平和式典やピースフォーラムではその場にいる一人一人が戦争や平和について必死になって考えていました。戦争はなぜ起こるのか、それを止めるにはどのようにしたらいいのか、一人一人の方法や気持ちは違えど、目指すべきは戦争をなくすということ。ということが感じられた3日間でした。

しかし、平和式典やピースフォーラムの終了後ネットの意見などを見ていると戦争を始めるべきだという人や、戦争についての知識がない人がたくさんいるということに気づきました。戦争について考えている人とそうでない人の差が大きすぎるのです。今回平和行事に参加して、たくさんの方が戦争や平和について考えているのだと感動したのですが、まだまだ世の中には知らない人がたくさんいます。そのためこれからもより多くの人に実感的に戦争や平和について考えることのできる機会や行事、教育を増やしていかなければならないと思いました。

私にできることはほんの少しかもしれませんが、できることをやっていきたいと思います。



皆には武力ではなく話し合いで解決するような指導者を選んでほしい。青少年ピースフォーラムの被爆体験談で被爆者の方がおっしゃっていました。私はこの言葉が最も心に残っています。

平和交流派遣団に参加する前、私は戦争をあまり身近に感じておらず、過去のことという認識でした。過去に起きてしまったことが二度とないように伝えることが一番大切だと思っていて、自分の人生の中で戦争を経験するかもしれないという不安もありませんでしたし、私にできることは戦争について知り、身近な人に話すということくらいだと思っていました。しかし被爆者の方の話を聞いて、戦争がいつ起きてもおかしくないということと、今後戦争が起きないようにするためにできることは戦争のことを伝えるだけではないということ学びました。できることの一つに被爆者の方がおっしゃっていたように、武力で物事を解決しない指導者を選ぶことなどが挙げられます。過去に起きた戦争の悲惨さを知り、伝えることももちろん大切ですが、それと同じくらい未来のことを考えて、武力を使わずとも物事を解決できる世の中にすることが大切だと感じました。自分自身が指導者となることは難しくても、武力ではなく話し合いで解決するような指導者を選ぶことは容易に行動に移しやすいと思いました。

平和交流派遣団を通して、いつもと同じ生活があって、楽しいと思えることがあって平和に生きていられることの素晴らしさを改めて感じることができました。そして、戦争が二度と起きないように自分にできることは何かを考えることができました。今後は、今回学んだことや考えたことを身近な人と話したり、社会の一員としてどのような世界を目指したいかを考えたりできるようになりたいと思います。



僕はこの青少年平和交流派遣団を通じて2つのことが印象に残っています。

1つ目は長崎の平和祈念式典です。平和祈念式典では自分が想像している何倍もの人が参加し、コロナ禍にも関わらずウクライナを始め様々な国籍の方がいました。それだけ長崎に起こった出来事が大きいことであると同時に自分がそんな式典に参加できたことがとても誇らしいことと感じました。

2つ目は今回の派遣団の殆どにおいて、武蔵野市のメンバーはもちろん同年代の人がどのような意見を持って平和に対してどのような考えを持っているか知れたことです。普段学校や家で生活していると見えてこない様なことを様々な人の意見で気づかされたことが自分にとっても大きく成長できた部分だと感じました。また、このような機会で日本の各地に様々な繋がりをもてたことも嬉しかったです。

これら2つの経験から自分が派遣団に参加する目的でもあった様々な同年代の方の意見を知り価値観を広げ、情報を受け取る側から発信する側になりたいという目標は達成出来たと考えます。事後報告でも自分が長崎で過ごした素晴らしい経験をまとめるという大事な作業が残っているので頑張りたいです。



「戦争だけは、戦争だけは何が何でも勘弁してほしい」

心からの言葉だった。これは、1日目のピースフォーラムでの被爆者の方のお言葉だ。しかし実際、文字で埋め尽くされた教科書を通してでしか戦争を知らない自分にとって、戦争の悲惨さというものは想像がしにくいものだった。そのため、その時はそのような戦争を憎む気持ちに共感しようとしても共感しきれなかったというのが正直な感想だった。しかし、翌日には考え方は変わっていた。二日目の原爆資料館でのことだ。

最初はそれが何の写真なのか分からなかった。数秒見つめてから気づく、皮膚が痛々しいほどに焼けた人の写真が今、目の前にある。男か女かも分からない。今まで読んできた優しく書かれた教科書から想像していたものとは、まるで別物だった。もし、この怪我人が自分の知り合いだったとなると、言葉が出ない。原爆投下後、生き残った多くの人がこのような最悪な形で親族との再会を果たすことになる。そして結果、多くの人が望んでもない国家間の争いごとによって理不尽に命を奪われていったことを知った。

現地へ行くことによって、東京に居ては分からなかったであろう、長崎の人々の平和への意識の高さを強く実感した。今、被爆者の平均年齢は84歳を超える。10年後には、被爆者の方々のお話を聞けること自体が珍しいという時代になってしまうかもしれない。教科書だけでは戦争の悲惨さを理解するには不十分だと思う。ましてや被爆者の方々が少なくなっていく今後において、どのようにして周りに伝えていけばよいのか。この3日間で多くのことを考えさせられた。



「微力だけど無力じゃない」。この言葉は青少年平和派遣団を通して聞いた言葉です。

私が派遣団に参加したのは、高校で第二次世界大戦のことを、深く勉強しそして、もっと深く知ろうと思ったからです。「戦争はだめ」「核兵器は恐ろしい」と教わりました。では、戦争はどうしたらなくなるか？核兵器はどのように恐ろしいのか？この派遣団に参加する前までは、ここまで考えずに終わっていました。

ですが、この派遣団を通して自分なりに考え、それを他の知らない誰かと交換することが出来ました。とても楽しく、貴重な経験になりました。住んでいる場所や教わってきたこと、平和に対する考え方が、自分と似ているようで違うことに自分の考えと相手の意見をより深く考えることができました。「どうしたら戦争がなくなるのか」について、青少年ピースフォーラムで、いろんな人と考えることが出来ました。政治に参加する、というのが私にもできることだと思いました。私は来年、参政権を得ることができます。だから「今はまだ何もしない」ではなく、参政権がなくても今の日本と世界のことを知ることができます。青少年ピースフォーラムでは、「今平和のために1人の学生ができること」を学べたと思います。

また、私がこの派遣団を通して学べたのは、長崎のことだけではありません。武蔵野市についても多くのことを学びました。中島飛行機、武蔵野市と長崎の繋がり。近くに住んでいたのに知らないことばかりでした。私はこのことについてとても恥ずかしく思いました。だから知れて良かったです。

例え小さくて些細な力でも、私の思う平和の実現のために、これまでの感謝とこれからの世界平和を考えていきたいと思います。また、この3日間の夏の経験を友達に話し「平和」について友達とも是非話したいです。そしてこの経験を活かして将来、戦争を知らない未来の人達に繋いでいけるような人になりたいです。



私は今回大学生サポーターとして、青少年平和交流派遣団に参加させて頂きました。そのため団全体に視線を向けていたこともあり、団員皆さんの変化にわずかながら気が付くことができました。

初めて団員全員が集まった結団式では、各々の意欲こそ垣間見えるものの、やはり初対面だと緊張したようで、団全体でどこかよそよそしさを感じていました。しかし、平和に関する事前学習を重ねていくうちに、徐々にその距離感が感じられなくなっていき、長崎派遣中は前から仲が良かったかのように楽しそうに過ごしていました。そういった姿を見て、私は勝手ながら派遣団の目的でもある平和の尊さを実感することができました。

団員皆さんの様子から私がこのように感じる事ができた理由は、やはり長崎にて二日間に渡って参加した青少年ピースフォーラムの影響が強いと思います。

戦争の実相を知り、平和な世界を実現することの重要性を考えた二日間は、今まで戦争というものを経験したことが教科書上で、表面上でしか捉えていなかったことに気が付かされました。そして、自分がどれほど戦争と平和に対して無知だったかを知りました。この体験を受けてから今私たちが送っている日々を目を向けたとき、私は平和の尊さを実感せずにはいられませんでした。

一度戦争が始まってしまうと、この平穏な日常が無慈悲にも壊されてしまうという恐怖。それは平和な現代を生きる私たちにとって、最も想像し難いものだと思います。だからこそ、次代を担う若者たちが過去から学び、未来につなげていくことがとても大切なことなのだと強く思います。



今回の青少年平和交流派遣団に大学生サポーターとして参加させていただき、長崎で戦争の歴史を学ぶことができましたし、参加した中学生高校生の派遣前後の成長を見ることができました。

私は中学3年生のときに修学旅行で訪れた広島で受けた遺産や資料館での衝撃を今でも鮮明に覚えています。ですが今回の派遣団ではそれ以上に、戦争や平和というものについて考えさせられました。そのおかげか、派遣1日目と2日目で参加した青少年ピースフォーラムでは、より意欲的に他の参加者の方々と意見交換をすることができました。今まで全く異なる文化や歴史の中で生きてきた他の参加者との意見交換は、とても新鮮なものでした。それを踏まえ、今後、自分は平和の実現のために何ができるのかということを深く考えることができました。

また、今回の派遣団に参加した団員の皆さんの成長は本当に素晴らしいものでした。特にコミュニケーション能力が著しく成長したのではないかと思います。女子は長崎に向かう飛行機に乗っている段階でかなり打ち解けていたものの、男子は初日の夕食の際もあまり会話がなく、正直かなり心配でした。ですが次の日の朝にはみんなで会話をしながら移動バスに乗り込んでくる姿を見て本当に安心しました。青少年ピースフォーラムでも他の参加者と活発に会話する姿を見て、なんだか誇らしく感じました。

今回の派遣事業で見聞きし学んだことは、参加した中学生高校生や大学生サポーターの私たちにとって生涯の宝物になると思います。この経験が将来の夢や目標につながっていけばと心から思います。



事後の活動について

活動報告書の作成および、11月23日に武蔵野市平和の日に合わせて開催される「武蔵野市平和の日イベント」での青少年平和交流派遣団報告会の準備のため、8月25日と11月2日に団員と大学生サポーターが顔を合わせました。

8月の報告書作成打ち合わせでは、報告会の発表をする担当と報告書の執筆の分担を決めました。

11月の報告会打ち合わせでは、各自考えた報告内容の読み合わせを行いました。報告会では、事前学習や長崎市にて平和祈念式典や青少年ピースフォーラムへ参加したことで、学び考えたことを報告します。打ち合わせを通して、平和の大切さや尊さを改めて確認しました。



編集後記 平和交流派遣団を終えて

大学生サポーター 加藤 舞
中野 綾音

初めに、事前学習に携わって頂いた方々、並びに青少年平和交流派遣団を派遣するにあたりお世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。

幸いにも今回は昨年に比べコロナが落ち着いた影響もあり、団員全員で長崎に行くことができました。今回青少年派遣団の団員として集まってくれた総勢 12 名の中高生と共に平和を学ぶことができ、とても嬉しく思います。実際にピースフォーラムに出席したり、平和祈念式典に出席したりすることで、平和であることの大切さを肌で感じることができました。また、原爆落下中心地や山王神社、城山小学校などを見学したことで、話を聞く以上に戦争や原爆の悲惨さを知ることができました。今回の平和派遣事業を通じて、戦争の悲惨さ、そして平和の尊さをより多くの人に伝え、共に理解していくことの重要性を改めて感じることができました。

団員の皆さんは、ピースフォーラムのフィールドワークで見た「原爆殉難教え子と教師の像」の両側に書かれていたメッセージを覚えていますか？そこには、「人の命が尊ばれますように」「世界が平和でありますように」と記されていました。ロシアがウクライナに侵攻してから既に半年以上が経過し、ここ最近では立て続けに北朝鮮が日本の排他的経済水域内にミサイルを発射しました。今私たちが生きるこの時代は、まさに平和が何たるかを考えさせられる時代だと言えます。尊い命が非人道的な武力によって無差別に奪われている中、世界が平和であるようにと行動することができるのは、次代を担う若者たちです。この平和交流派遣事業を経て命と平和の尊さを学んだ皆さんが、1人でも多くの人たちにその尊さを伝え、未来の平和を作り上げていけたら、と思います。

最後に、6月13日の結団式で結成された平和交流派遣団で団員が共に学び、感じ、考えたことが、この報告書を読まれた皆さんにお伝えできれば幸いです。



事務局より

青少年平和交流派遣団団長 市民部 市民活動推進課 毛利 悦子
市民部 市民活動推進課 高橋 瑠奈

終戦から 77 年を迎え、戦争体験者が高齢化していく中、若い世代にとっては周りの人から戦争について話を聞く機会は減り、戦争は遠い存在になりつつあります。一方、ウクライナ情勢などのニュースが毎日のように流れ、戦争や平和を意識する機会は増えているのではないかと考えます。

青少年平和交流派遣事業は、戦争の悲惨さと平和の大切さを次世代に継承するために、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」や「平和祈念式典」へ青少年を派遣し、(公財)長崎平和推進協会が主催する青少年ピースフォーラムのプログラムに参加し、全国から集う青少年との交流やフィールドワーク等を通じて、被爆の実相に直接触れるとともに、平和の大切さを学び、考えるきっかけとしてもらうことを目的として実施いたしました。

今回参加した団員たちは、長崎市への派遣に先立ち、3回の事前学習会を行いました。この学習会でも市内の空襲や戦争にまつわることに興味を持ち、また、長崎市の歴史などいろいろな情報を集めて学習発表に臨むなど、意欲的に取り組んでいました。

派遣先の長崎市では、被爆体験者の方のお話を聞いたり、遺構をめぐることで、団員たちは平和の大切さを肌で感じ、認識を新たにしました。また、全国から参加した同世代の仲間と意見交換などを行う青少年ピースフォーラムでは、団員たちは自らの言葉で平和について意見を伝えるとともに、仲間の意見を吸収していました。

6月の結団式から長崎を訪れた8月、そして 11 月の報告会に向けて、皆大きく成長しました。団員たちがこの事業で体験したことや感じたことを友人や家族、地域など様々な機会を通して伝え活かしていくことを期待しています。

武蔵野市青少年平和交流派遣団 活動報告書

編集担当
加藤舞、中野綾音

発行 令和4年 11 月
武蔵野市 市民部 市民活動推進課

